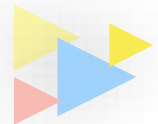


# 日本のデジタル文学地図 —国際的な教育・研究への活用—

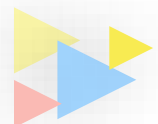
## The Digital Literary Map of Japan: Applications in International Education and Research

中尾 薫（大阪大学教授）  
黄 夢鴿（大阪大学特任研究員）

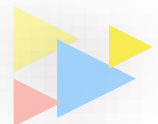
2025年9月12日  
於：ハイデルベルク大学



能における名所「隅田川」の利用



デジタル文学地図と隅田川



能以降の隅田川のイメージと今後の課題

# 能「隅田川」

【作者】観世元雅 注 1394 or 1401 -1432 世阿弥の嫡男

【能柄】四番目物・狂女物・大小物

武蔵と下総の国境にある隅田川の渡し守が客を待っていると、旅人が来て、あとから女物狂がやって来ることを知らせる。それは、わが子を人買いにさらわれて心が乱れた女で、京都からはるばる子を尋ね求めてこの東国まで来たのだった（〈カケリ〉等）。女は川辺の鳥を見て船頭に名を尋ね、それが都鳥だと知って業平東下りの故事を思い出し、わが身に引きくらべて遠い旅路を振り返り、感慨を催す。女が旅人たちと対岸に渡る船中で、船頭が哀れな話をして聞かせる。昨年の春、無情な人買いがここに置き去りにした病気の少年があった。名を尋ねると、吉田の某の子息梅若丸と言ひ、間もなく落命したので、人人が墓を作って吊ったというのである（〈語り〉）。話を聞いた女が涙ながらに自分こそその子の母だと言うので、船頭も同情して墓に連れて行く。女は墓前で世の無常をじっとかみしめるのだった（〈上歌〉）。人々が念仏を唱えると、その中にまじって少年の声が聞こえ塚から姿が現れるので、母親が近付こうとすると消えてしまう。夜がほのぼのと明けて見ると、わが子と思っただのは塚の上の草であった。

（平凡社『能・狂言事典』「隅田川」項による）

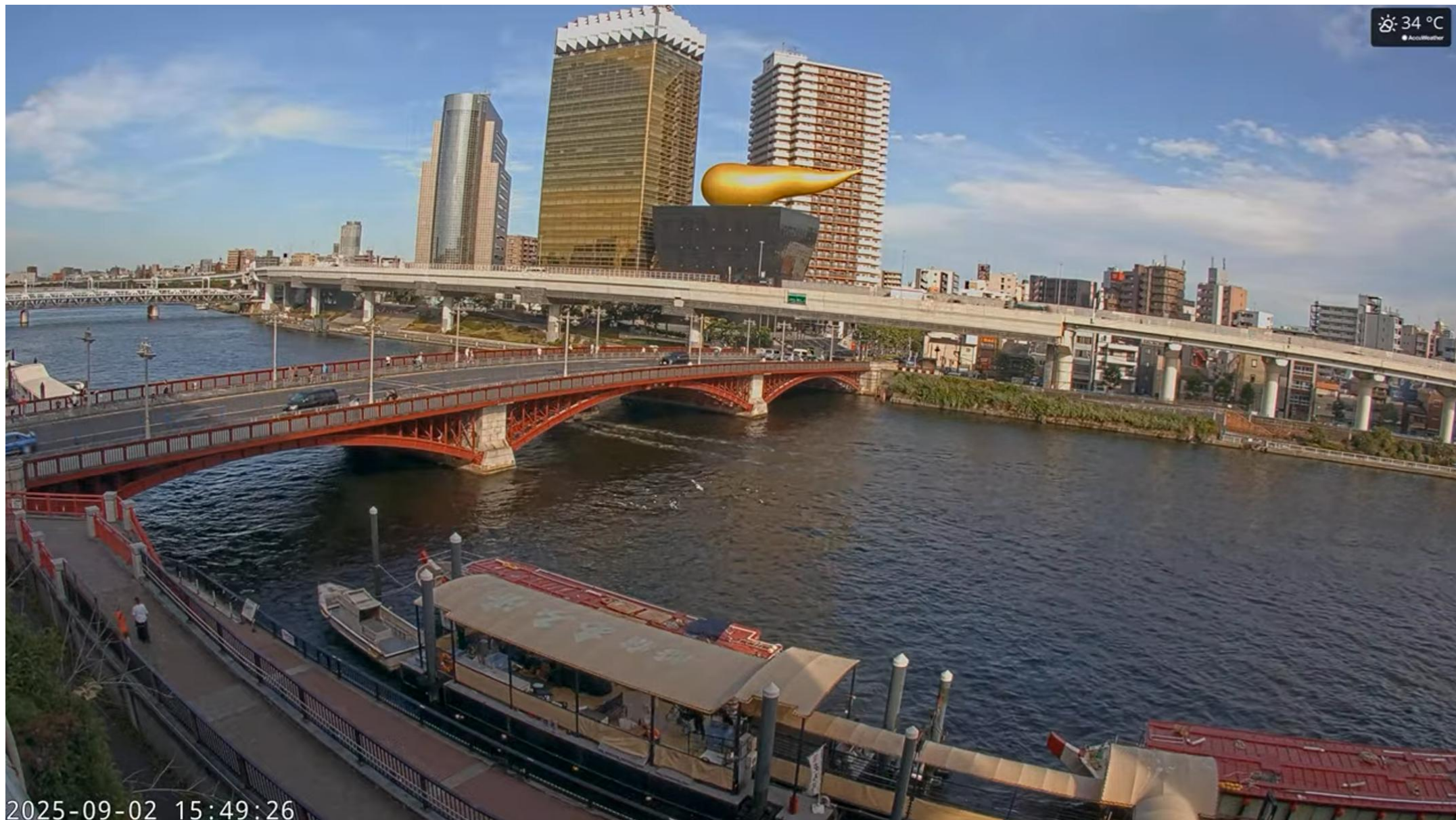
- ほぼセリフ劇。複雑な修辞が少なく、分かりやすい筋。
- **物狂能のなかでは唯一、悲劇的最後。ほかの作品は、再会で終わる。**
- 能以後、明暦二（1656）年刊の仮名草子『角田川物語』
- 「隅田川物」として、人形浄瑠璃、歌舞伎、舞踊などの題材となる。

（例）節経「すみ田川」（1661年以前）、『今角田川』（1688）、  
近松門左衛門『双生隅田川』（1720年）、歌舞伎『出世隅田川』（1701）etc.  
（平凡社『新版 歌舞伎事典』参照）

- イギリスの作曲家ブリテンが、オペラ『カーリュー・リヴァー』（1964）を作る。  
（Curlew River — A Parable for Church Performance）

- 国内外で比較的良く知られた作品。
- 日本文学の授業の題材としては扱いやすい。

# 現在の隅田川



舞台 武蔵と下総の国境にある隅田川  
京都北白川からきた母

シテ (母) の謡「千里を行くも親心。子を忘れぬと聞く物を」

## 隅田川 / Sumidagawa

基本情報

歴史

和歌・漢詩・俳諧 (2)

物語・説話 (2)

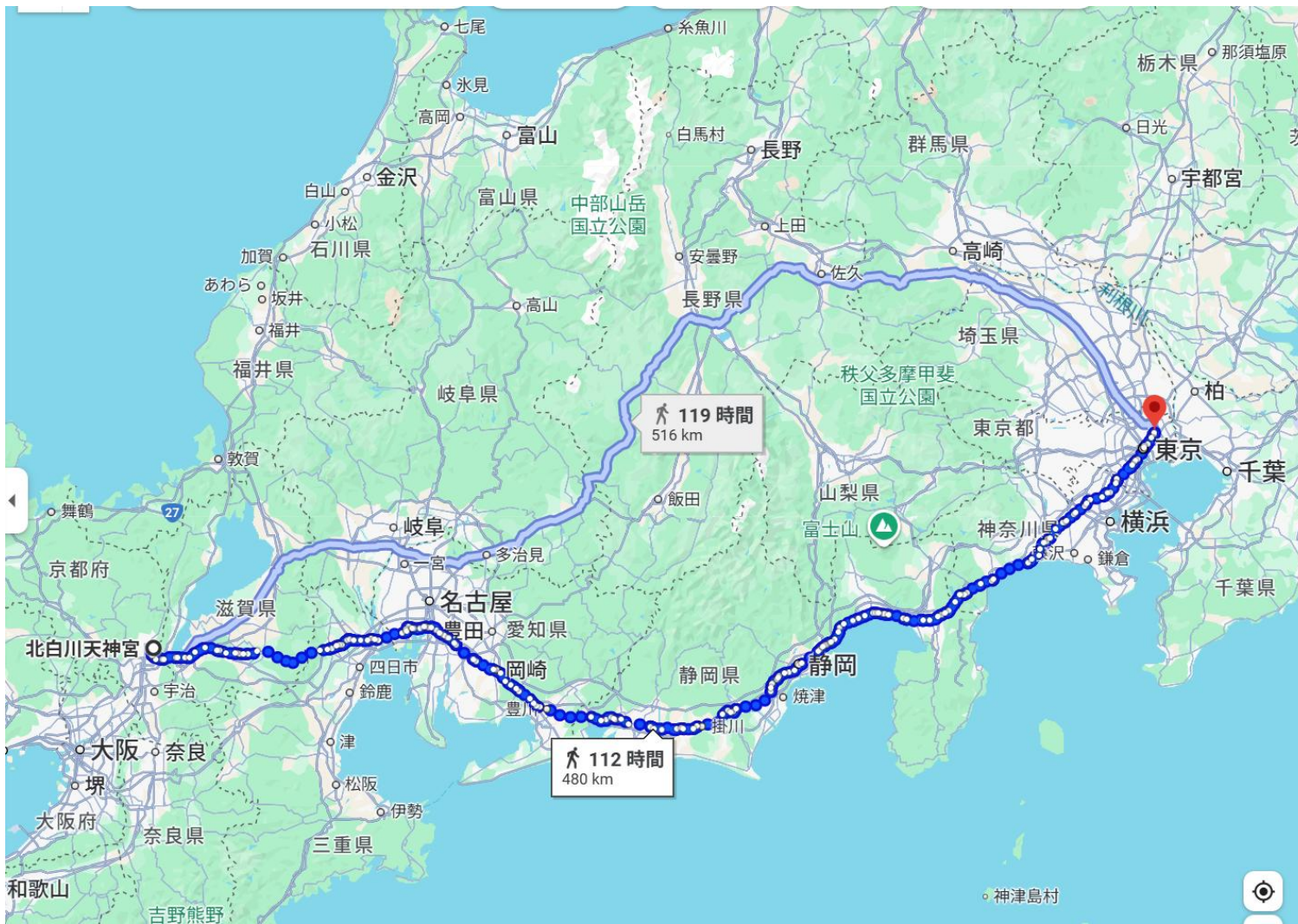
謡曲 (0)

絵図等 (2)



- 隅田川は東にあり、京都から遠く離れている。
- 地図で距離を見せることで、「末も東のたびごろも、日もはるばるの心かな」「跡遠山に越えなして」「逢坂の関の東の国遠き、東とかやに下りぬと、聞くより心乱れつ」の詞の意味の深さが実感できる。

# GoogleMapで検索すると



北白川から隅田川の距離

↓  
480km

↓  
徒歩で約5日間

### 船に乗るときの女と船頭との会話。

- ワキ「都の人といひ狂人といひ。面白う狂うて見せ候へ。狂はずは此舟には乗せまじいぞとよ。
- シテ「うたてやな隅田川の渡守ならば。日も暮れぬ舟に乗れとこそ承るべけれ。かたの如くも都の者を。舟に乗るなと承るは。隅田川の渡守とも。覚えぬ事な宣ひそよ。
- ワキ詞「実に実に都の人とて。名にし負ひたる優しさよ。
- シテ「なう其詞はこなたも耳に留るものを。彼の業平も此渡にて。名にしおはば。いざ言問はん都鳥。我が思ふ人は有りやなしやと。

詞「なう舟人。あれに白き鳥の見えたるは。都にては見馴れぬ鳥なり。あれをば何と申し候ふぞ。

ワキ「あれこそ沖の鷗候ふよ。

シテ「うたてやな浦にては千鳥とも云へ鷗とも云へ。など此隅田川にて白き鳥をば。都鳥とは答へ給はぬ。

ワキ「実に実に誤り申したり。名所には住めども心なくて。都鳥とは答へ申さで。

シテ「沖の鷗とゆふ波の。

ワキ「昔にかへる業平も。

シテ「有りや無しやと言問ひしも。

ワキ「都の人を思妻。

シテ「わらはも東に思子の。ゆくへを問ふは同じ心の。

ワキ「妻をしのび。

シテ「子を尋ぬるも。

ワキ「思は同じ。

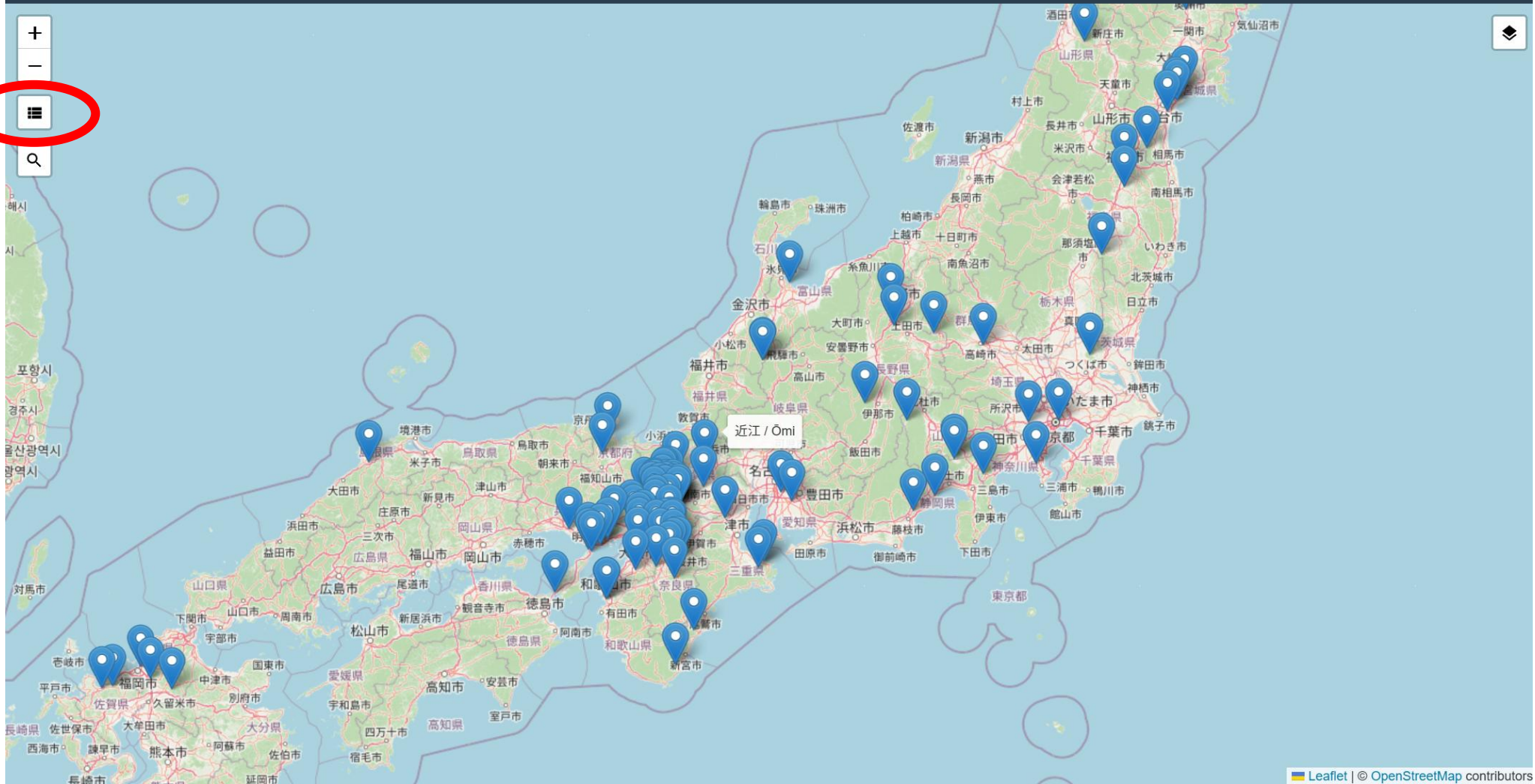
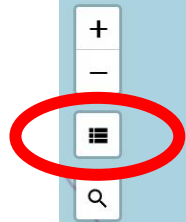
シテ「恋路なれば。

地歌「我もまた。いざ言問はん都鳥。いざ言問はん都鳥。我が思子は東路に。有りやなしやと。問へども問へども答へぬはうたて都鳥。鄙の鳥とやいひてまし。実にや舟ぎほふ。堀江の川のみなぎはに。来居つつ鳴くは都鳥。それは難波江これは又隅田川の東まで。思へば限なく。遠くも来ぬるものかな。さりとは渡守。舟こそりて狭くとも。乗せさせ給へ渡守さりとは乗せてたび給へ。

ワキ「かかるやさしき狂女こそ候はね。急いで舟に乗り候へ。

# デジタル文学地図

日本のデジタル文学地図



# デジタル文学地図

101名所

嵐山	Arashiyama	135.666763 /35.009451	9	0	0
生駒	Ikoma	135.678975 /34.67852	9	2	0
和泉	Izumi	135.470091 /34.431728	7	1	0
出雲	Izumo	132.744625 /35.33245	1	0	0
江口	Eguchi	135.545721 /34.755225	1	0	0
大津	Ōtsu	135.858423 /35.014053	2	4	0
春日	Kasuga	135.847694 /34.682861	65	15	0
象潟	Kisagata	139.913029 /39.211483	2	4	用
貴船	Kibune	135.759717 /35.11438	1	0	11
清水	Kiyomizu	135.785048 /34.994839	0	3	0
鞍馬山	Kuramayama	135.771356 /35.121748	4	5	16
更科	Sarashina	138.081213 /36.630332	9	0	0
隅田川	Sumidagawa	139.790887 /35.681565	2	2	0
高砂	Takasago	134.791363 /34.775343	44	5	0

## 隅田川 / Sumidagawa

基本情報

歴史

和歌・漢詩・俳諧 (2)

物語・説話 (2)

謡曲 (0)

絵図等 (2)



地名 (漢字) :	隅田川
地名 (ふりがな) :	すみだがわ
地名 (ローマ字) :	Sumidagawa
旧国名 :	武蔵国

## 基本情報

地名（漢字）：隅田川

地名（ふりがな）：すみだがわ

地名（ローマ字）：Sumidagawa

旧国名：武蔵国

都道府県：東京都

経緯度：緯度：35.681565 経度：139.790887

歌枕：はい

名所：はい

歌枕としての特徴：東国（東都）の大河

連想（歌枕として何を呼び起こしているか）：物ぐるい、母、狂人、船頭、塚、念仏、  
信土（待乳）山、武蔵、都鳥

## 地理情報

東京都東部を貫流する荒川の分流であり、北区岩淵で荒川から分岐する。岩淵から延長約25キロ。墨田区鐘ヶ淵から下流をいうこともあり、千住大橋から勝鬨橋まで16の橋が架かる。墨田川、角田川ともいう。江戸期、下流は大川とよばれ、歌舞伎・浮世絵・俳句・川柳・音曲などの大衆文化は大川筋から誕生した。

その親水の歴史は明治になっても継承され、工業の基地として大きく機能した。造船・セメント・化学薬品・製紙・機械工業などの近代工業、さらに都市型日用消費財産業・伝統工芸、多くの製造卸の生産・流通基地として下町中小企業地帯を生んだ。舟運と生産活動による経済の繁栄は川の両岸に盛り場を発達させた。

## 地理情報

基本情報

歴史

和歌・漢詩・俳諧 (2)

物語・説話 (2)

謡曲 (0)

絵図等 (2)

地誌情報 (日本語) ⓘ :

東京都東部を貫流する荒川の分流であり、北区岩淵で荒川から分岐する。岩淵から延長約25キロ。墨田区鐘ヶ淵から下流をいうこともあり、千住大橋から勝鬨橋まで16の橋が架かる。墨田川、角田川ともいう。江戸期、下流は大川とよばれ、歌舞伎・浮世絵・俳句・川柳・音曲などの大衆文化は大川筋から誕生した。その親水の歴史は明治になっても継承され、工業の基地として大きく機能した。造船・セメント・化学薬品・製紙・機械工業などの近代工業、さらに都市型日用消費財産業・伝統工芸、多くの製造卸の生産・流通基地として下町中小企業地帯を生んだ。舟運と生産活動による経済の繁栄は川の両岸に盛り場を発達させた。

地誌情報 (英語) ⓘ :

The Sumida River is a branch of the Arakawa River that flows through eastern Tōkyō and branches off from the Arakawa River at Iwabuchi, Kita Ward. It extends about 25 kilometers from Iwabuchi. There are 16 bridges from the Senju Bridge to the Kachidoki Bridge, extending downstream from Kanegafuchi in Sumida Ward. Different writing conventions exist. During the Edo period, the downstream was called the Ōkawa River, and popular culture such as *kabuki*, *ukiyoe*, *haiku*, *senryū*, and music was born on the Ōkawa River. The history of the river's affinity for water was carried on into the Meiji era, and the river functioned as a major industrial base. Modern industries such as shipbuilding, cement, chemicals, paper manufacturing, and machinery, as well as urban consumer goods industries, traditional crafts, and the production and distribution base for many manufacturers and wholesalers, gave birth to the downtown small and medium business district. The prosperity of the economy based on shipping and production activities led to the development of entertainment areas on both banks of the river.

## 歴史情報

『古今集』に「武蔵の国と下つ総の国との中にあるすみだがは」とあるように、昔は両国の境をなす川であった。それゆえ『建保名所百首』では下総国の名所とし、『歌枕名寄』巻二一では武蔵国の歌枕としているが、いずれも誤りとはいえない。近世初期のいわゆる利根川締め切りの大工事までは、荒川のみならず、多くの河川が流れ込む大河であったかと考えられる。

『伊勢物語』九段に見え、在原業平が都鳥の和歌を詠んだ所として有名で、観世元雅の作とされる謡曲の狂女物の傑作『隅田川』の舞台ともなった。歌の作例としては『堀川百首』における源師頼の「すみだ川みせきにかかる白浪の立ち帰るべき心地こそせぬ」が早い例にあたる。平安末から鎌倉時代にかけて歌における隅田川は「東国の大河」というイメージが強かったが、江戸幕府が開かれると、京都の賀茂川に匹敵する東都の川と意識されるようになる。とくに加藤千蔭の「すみだ河夕漕ぎ渡り筑波嶺の端山に続く雪を見るかな」や村田春海「すみだ河堤の花の唐錦春はきて見ぬ人やなからん」など、江戸在住の歌人にとって隅田川はもはや歌枕というより生活に密着した身近な河川として詠まれた。

## 歴史情報

歴史 (日本語) ⓘ :

『古今集』に「武蔵の国と下つ総の国との中にあるすみだがは」とあるように、昔は両国の境をなす川であった。それゆえ『建保名所百首』では下総国の名所とし、『歌枕名寄』巻二一では武蔵国の歌枕としているが、いずれも誤りとはいえない。近世初期のいわゆる利根川締め切りの大工事までは、荒川のみならず、多くの河川が流れ込む大河であったかと考えられる。『伊勢物語』九段に見え、在原業平が都鳥の和歌を詠んだ所として有名で、観世元雅の作とされる謡曲の狂女物の傑作『隅田川』の舞台ともなった。歌の作例としては『堀川百首』における源師頼の「すみだ川みせきにかかる白浪の立ち帰るべき心地こそせぬ」が早い例にあたる。平安末から鎌倉時代にかけて歌における隅田川は「東国の大河」というイメージが強かったが、江戸幕府が開かれると、京都の賀茂川に匹敵する東都の川と意識されるようになる。とくに加藤千蔭の「すみだ河夕漕ぎ渡り筑波嶺の端山に続く雪を見るかな」や村田春海「すみだ河堤の花の唐錦春はきて見ぬ人やなからん」など、江戸在住の歌人にとって隅田川はもはや歌枕というより生活に密着した身近な河川として詠まれた。

歴史 (英語) ⓘ :

As the *Kokinshū* says, "The Sumida River lies between the provinces of Musashi and Shimōsa", it used to be a river that formed the border between the two provinces. Therefore, the *Kenpo meisho hyakushu* (1215) describes it as a famous place in Shimōsa Province, while the *Utamakura nayose*, vol. 21, lists it as a famous place in Musashi Province. Until the regulation of the Tonegawa River in the early modern period, the Arakawa River and many other rivers flowed into the area and formed a huge stream. It is famous as the place where Ariwara no Narihira wrote a waka poem about the *miyakodori* (bird of the capital) in the ninth chapter of *Ise monogatari* (The Tales of Ise), and it is also the setting for *Sumidagawa*, a masterpiece of the noh drama in the category of "mad women" written by Kanze no Motomasa. One of the earliest examples of a poem written about this area is "The white waves against the weir of Sumidagawa, will they ever return to where they came from" by Minamoto no Moroyori in the *Horikawa hyakushu* (1179). From the end of the Heian to the Kamakura period, the Sumida River had a strong image in poetry as "the great river of the eastern provinces," but with the establishment of the Edo shogunate, it came to be regarded as the river of the eastern capital, comparable to the Kamo River in Kyōto. In particular, poets living in Edo wrote about the Sumida River as a river closely related to their daily lives, rather than as a conventional *utamakura*, such as Katō Chikage "Sumida River, rowing across in the evening, looking at the snow that continues to the edge of Tsukuba Ridge" or Murata Harumi "Sumida River, the Chinese brocade on the bank of flowers, spring has come and who would not go and see it?"

## 和歌・漢詩・俳諧

ID (国歌大観番号)	詞書	テキスト	キーワード
古今(411)	むさしの国としもつふさのくにとの中にある角田川のほとりにいたりて、都のいと恋しうおほえければ、しはし川のほとりにおりみて、思ひやれは、かきりなくとをくもきにけるかなと思わひて、なかめをるに、わたしもり、はや船にのれ、日くれぬといひければ、舟にのりてわたらんとするに、みな人物わひしくて、京に思ふ人なくしもあらず、さるおりに、しろき鳥の、はしとあしとあかき、川のほとりにあそひけり。京には見えぬ鳥成ければ、みな人みしらす、わたしもりに、これは何鳥そととひければ、これなん宮ことりといひけるをききてよめる	名にしおはは / いさ事とはん / 都鳥 / わか思ふ人は / ありやなしやと	すみだかわ
続古今 (936)	弘長二年奉りし百首の中に、河を	此里は / すみた河原も / ほととをし / いかなる鳥に / 都とはまし	すみだかわ

## 古今(411)

巻・部立：巻第九・羈旅歌

詞書：むさしの国としもつふさのくにとの中にある角田川のほとりにいたりて、都のいと恋しうおほえければ、しはし川のほとりにおりあて、思ひやれば、かきりなくとをくもきにけるかなと思わひて、なかめをるに、わたしもり、はや船にのれ、日くれぬといひければ、舟にのりてわたらんとするに、みな人物わひしくて、京に思ふ人なくしもあらず、さるおりに、しろき鳥の、はしとあしとあかき、川のほとりにあそひけり。京には見えぬ鳥成ければ、みな人みしらす、わたしもりに、これは何鳥そととひければ、これなん宮ことりといひけるをききてよめる

テキスト：名にしおはは / いさ事とはん / 都鳥 / わか思ふ人は / ありやしやと

テキスト (ローマ字)：na ni shi owa ba / iza koto towan / miyakodori / wa ga omou hito wa / ari ya nashi ya to

キーワード：すみだがわ

著者：在原業平

著者 (ローマ字)：Ariwara no Narihira

URL ⓘ : <https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/200007093/viewer/75>

翻訳

テキスト：oh capital bird/ if you are true to your name/ you will know tell me/ if the one whom I love/ is still in this world of partings

著者・出典：Rodd, Laurel R. and Henkenius, Mary C. (1984): p.166



## 古今(411)

巻・部立：巻第九・羈旅歌

詞書：むさしの国としもつふさのくにとの中にある角田川のほとりにいたりて、都のいと恋しうおほえければ、しはし川のほとりにおりあて、思ひやれば、かきりなくとをくもきにけるかなと思わひて、なかめをるに、わたしもり、はや船にのれ、日くれぬといひければ、舟にのりてわたらんとするに、みな人物わひしくて、京に思ふ人なくしもあらず、さるおりに、しろき鳥の、はしとあしとあかき、川のほとりにあそひけり。京には見えぬ鳥成ければ、みな人みしらす、わたしもりに、これは何鳥そととひければ、これなん宮ことりといひけるをききてよめる

テキスト：名にしおはは / いさ事とはん / 都鳥 / わか思ふ人は / ありやしやと

テキスト (ローマ字)：na ni shi owa ba / iza koto towan / miyakodori / wa ga omou hito wa / ari ya nashi ya to

キーワード：すみだがわ

著者：在原業平

著者 (ローマ字)：Ariwara no Narihira

URL ⓘ : <https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/200007093/viewer/75>

### 翻訳

テキスト：oh capital bird/ if you are true to your name/ you will know tell me/ if the one whom I love/ is still in this world of partings

著者・出典：Rodd, Laurel R. and Henkenius, Mary C. (1984): p.166

## 物語・説話

資料	章段名・章段番号	活字本頁	テキスト	キーワード
伊勢物語	9	117 (旧大系)	なをゆきゆきて、むさしの国としもつふさの国とのなかに、いとおほきなる河あり。それをすみだ川といふ。其河のほとりにむれみておもひやれば、かぎりなく遠くもきにけるかなとわびあへるに、わたしもり、はや舟にのれ、日もくれぬといふに、のりてわたらんとするに、みな人物わびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず。さる折しも、しろき鳥のはしとあしとあかき、しぎのおほきさなる、水のうへにあそびつついををくふ。京には見えぬ鳥なれば、みな人見しらず。わたしもりにとひければ、これなんみやこ鳥」といふをききて、 名にしおはばいざこととはん都鳥わが思ふ人は有やなしやと とよめりければ、舟こそりてなきにけり。	
平家物語	巻第七・福原落	63	こたうにせきふへたてて月海上にうかへりきよくほの波をわけしほにひかれて行舟は半天の雲にさかのほる日数ふれは都はさんせん程をへたてて雲井のよそにそ成にけるはるはるきぬと思へ共たたつきせぬ物はなみたなりなみのうへにしろき鳥のむれゐるを見給ひてはかれならんありはらのなにかしのすみた川にて事とはれけん名もむつまじき都鳥かなとあはれなり寿永二年七月廿五日に平家みやこをおちはてぬ	

## 伊勢物語 9 117 (旧大系)

章段名・章段番号：9

活字本頁：117 (旧大系)

テキスト：

なをゆきゆきて、むさしの国としもつふさの国とのなかに、いとおほきなる河あり。それをすみだ川といふ。其河のほとりにむれゐておもひやれば、かぎりなく遠くもきにけるかなとわびあへるに、わたしもり、はや舟にのれ、日もくれぬといふに、のりてわたらんとするに、みな人物わびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず。さる折しも、しろき鳥のはしとあしとあかき、しぎのおほきさなる、水のうへにあそびつついををくふ。京には見えぬ鳥なれば、みな人見しらず。わたしもりにとひければ、これなんみやこ鳥」といふをききて、

名にしおはばいざこととはん都鳥わが思ふ人は有やなしやと  
とよめりければ、舟こそりてなきにけり。

URL ⓘ : <http://codh.rois.ac.jp/iiif/iiif-curation-viewer/index.html?pages=200024830&pos=11&lang=ja>

翻訳

^

テキスト： They went on even further, until they came to a large river on the border between the provinces of Musashi and Shimōsa. It was called the Sumida. They clustered together on the bank and lamented having come so terribly far. “All aboard!” the ferry cried, “The sun will soon be down!” So they got on the ferry to cross. Each of them missed someone in the Capital, and their spirits were low. White, snipe-sized birds with red beaks and legs happened to be playing about on the water, catching fish. These birds were new to them all; they hadn’t seen any like them in the Capital. They asked the ferryman what they were. “Why, they’re Capital birds (miyako-dori), he replied. At this, one of them said. If your name be true, then I will ask you something. Say, Capital birds, of the one who has my heart: does she live or has she died? Everyone aboard shed tears.

著者・出典： Mostow, Tyler (2010): p.36

## 『伊勢物語』 九段

なほゆきゆきて、武蔵の国と下つ総の国とのなかにいと大きな河あり。それをすみだ河  
といふ。その河のほとりにむれみて、思ひやれば、**かぎりなく遠くも来にける**かな、とわび  
あへるに、渡守、「はや船に乗れ、日も暮れぬ」といふに、乗りて渡らむとするに、みな人  
ものわびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず。さるをりしも、白き鳥の、はしとあしと赤  
き、鴨の大ききなる、水の上に遊びつつ魚を食ふ。京には見えぬ鳥なれば、みな人見しらず。  
渡守に問ひければ、「これなむ都鳥」といふを聞きて、

**名にしおはばいざ言問はむみやこどりわが思ふ人はありやなしやと**  
とよめりければ、船こぞりて泣きにけり。

- 隅田川は京から遠く離れている東国の大きい川。  
ここを渡りつつ都への望郷の思いを都鳥に託して詠んでいる。

武蔵国と下総国との中にある隅田河のほとりに至りて都のいと恋しうおぼえければ、しばし河のほとりにおりゐて、「思ひやればかぎりなく遠くも来にけるかな」と思ひわびてながめをるに、渡守、「はや舟に乗れ。日暮れぬ」といひければ、舟に乗りて渡らむとするに、みな人ものわびしくて、京に思ふ人なくしもあらず、さる折に、白き鳥の嘴と足と赤き、河のほとりに遊びけり、京には見えぬ鳥なりければ、みな人見知らず。渡守に「これは何鳥ぞ」と問ひければ、これなむ都鳥」と言ひけるを聞きてよめる

名にしおはばいざ事問はむ都鳥わが思ふ人はありやしやと

(『古今集』・羈旅歌・411・在原業平)

## 和歌 (DLMにない例)

題知らず

宮こどりいく世かここにすみだ河ゆききの人に名のみとはれて

(『新後撰集』・羈旅歌・593・法印清誉)

羈旅の心を

すみだ河故郷思ふ夕暮に涙をそふる都どりかな

(『新拾遺集』・羈旅歌・765・藤原俊成)

百首歌めされし次に、羈旅

限なく遠くきにけりすみだ河こととふ鳥の名をしたひつつ

(『新拾遺集』・羈旅歌・766・後光厳院)

→都から遠く離れている隅田川と都鳥

## 和歌 (DLMにない例)

- 『建保名所百首』 (1215年) ・角田川 (下総国)

こよひ又たれやどからんいほざきのすみだ河原の秋の月かげ	(1141・順徳院)
都どりすみだ河原に舟出しぬさしてとふべき人しなければ	(1142・行意)
水茎の跡かきながすすみだ河事づてやらむ人もとひこず	(1143・藤原定家)
たれここに角田河原の都鳥都恋しき音のみなくらん	(1144・藤原家衡)
昔さそふ月は雲ゐにすみだ河はるかになし思ふ都も	(1145・俊成女)
都にてなれし月さへ角田河事とふ鳥のうきねのみかは	(1146・内侍)
月影のさすやいほざきすみだ河越えてまつちの山のかひより	(1147・藤原家隆)
中中にわれに事とへ都鳥すむや河辺の外にこたへん	(1148・藤原忠定)
すみだ河なにたつ鳥の都には待つらむ月ををしむ山のは	(1149・藤原知家)
名にしおふ鳥に事とふ角田河昔の波の跡を恋ひつつ	(1150・藤原範宗)
わすれねよなれのみここに角田河わがおもふ方の鳥のなもうし	(1151・藤原行能)
二渡守しばしやすらへ角田河ぬれぬといはば暮を待ちみん	(1152・藤原康光)

## 物語等 (DLMにない例)

隅田川のほとりにて都鳥に言問ひ、八橋のわたりにて慣れにし妻を恋ひたるなど、都の外まであくがるらむも、ただかの至らぬ隈なきしわざにこそはべるめれ。

(『無名草子』47「伊勢物語・大和物語」)

浪の上二白き鳥のむれみるを見給ひては、「かれならん、在原のなにがしの、隅田川にてこと問ひけん、名もむつましき都鳥にや」と哀れなり。

(『平家物語』巻第七「福原落」)

→ 『伊勢物語』以来のイメージを継承している。

## 物語等 (DLMにない例)

さても、**隅田河原**近きほどにやと思ふも、いと大なる橋の清水・祇園の橋の体なるを渡るに、きたなげなき男二人会ひたり。「このわたりに**隅田川**といふ川のはべるなるは、いづくぞ」と問へば、「これなむその川なり。この橋をば須田の橋と申しはべり。昔は橋なくて、渡し舟にて人を渡しけるも、わづらはしくとて、橋出で来てはべり。**隅田川**などはやさしきことに申し置きけるにや、賤がことわざには、須田川の橋とぞ申しはべる。この川の向かへをば、昔は三芳野の里と申しけるが、賤が刈り乾す稲と申す物に実の入らぬ所にてはべりけるを、時の国司、里の名を尋ね聞きて、『ことわりなりけり』とて、吉田の里と名を改められて後、稲うるはしく実も入りはべり」など語れば、**業平の中將、都鳥に言問ひけるも思ひ出でられて、鳥だに見えねば、**

**尋ね来しかひこそなけれ隅田川住みけむ鳥の跡だにもなし**

川霧籠めて、来し方行く先も見えず。涙にくれてゆくをりふし、雲居遙かに鳴く雁がねの声も折知りがほにおぼえはべりて…

『とはずがたり』 卷四・十八「隅田川」

# 歌枕「隅田川」のイメージの継承と創作の継承と創作

従来、能「隅田川」の修辞や典拠については、都鳥のくだりが主に説明される。

→都鳥に京都に残してきた人に思いを寄せる業平の姿に、我が子に思いをせる母親の思いを重ね合わせる役割がある。デジタル文学地図で、和歌、物語の用例を同じサイトで見られる。

例) 渡辺直「能「隅田川」についての研究—境界としての隅田川と関連して—」(『総合文化研究』第2号、2003年5月)では、隅田川が、空間的な距離の遠さを示す場所であるとともに、「都と鄙」「現世と来世」「昼と夜」の境界として機能していることを論じる。

→「隅田川」という地名を読み込んだ和歌・物語などをジャンルを問わずに確認することで、能「隅田川」が、過去の和歌や物語をいかに継承しているかが見えてくる。

(従来の典拠研究を更新する発見の可能性?)

→月のイメージは、和歌の描かれ方の踏襲の可能性

## 絵図

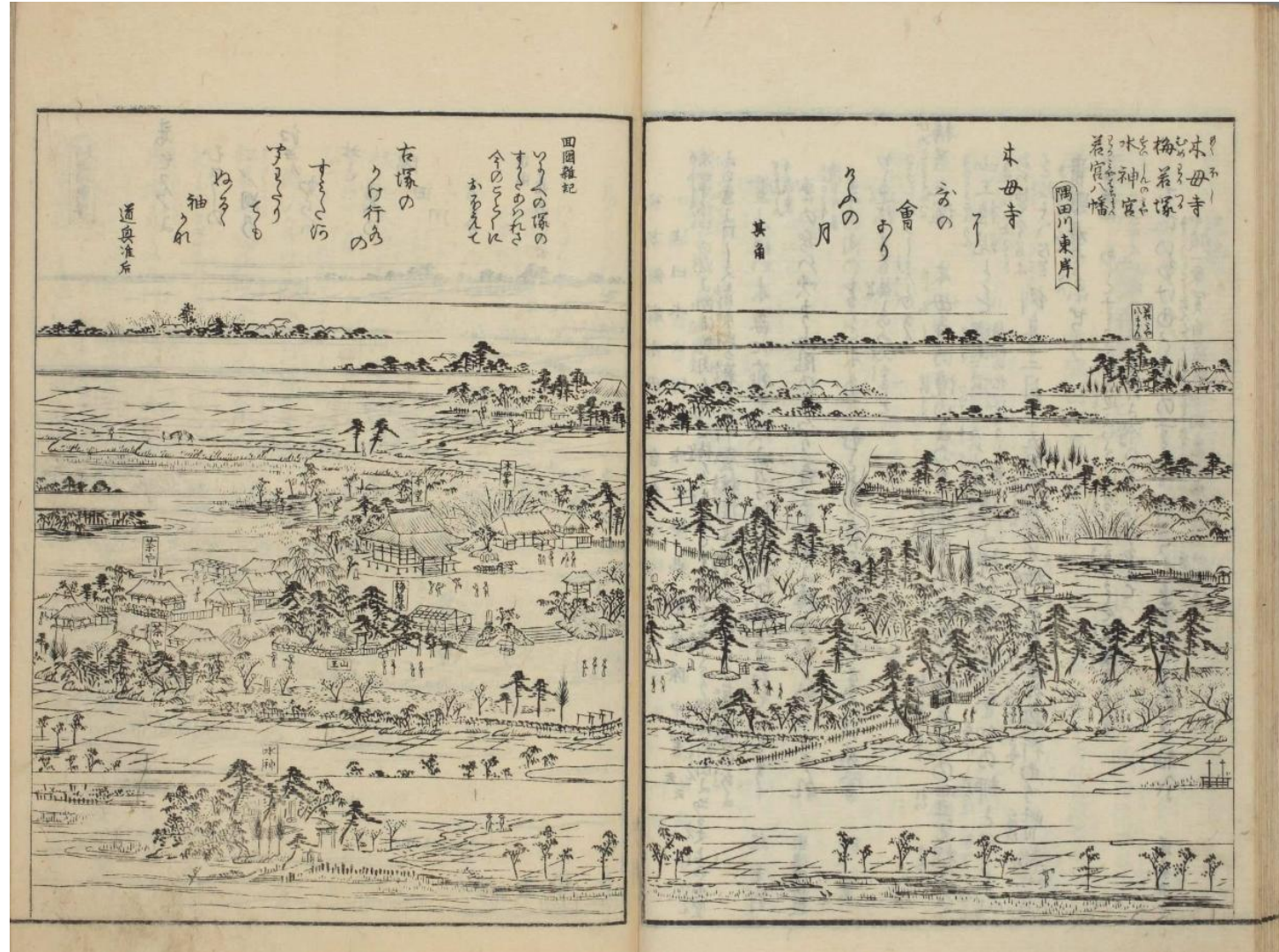
[江戸名所図会 \(国文研\)「大川橋 隅田川西岸」](#)



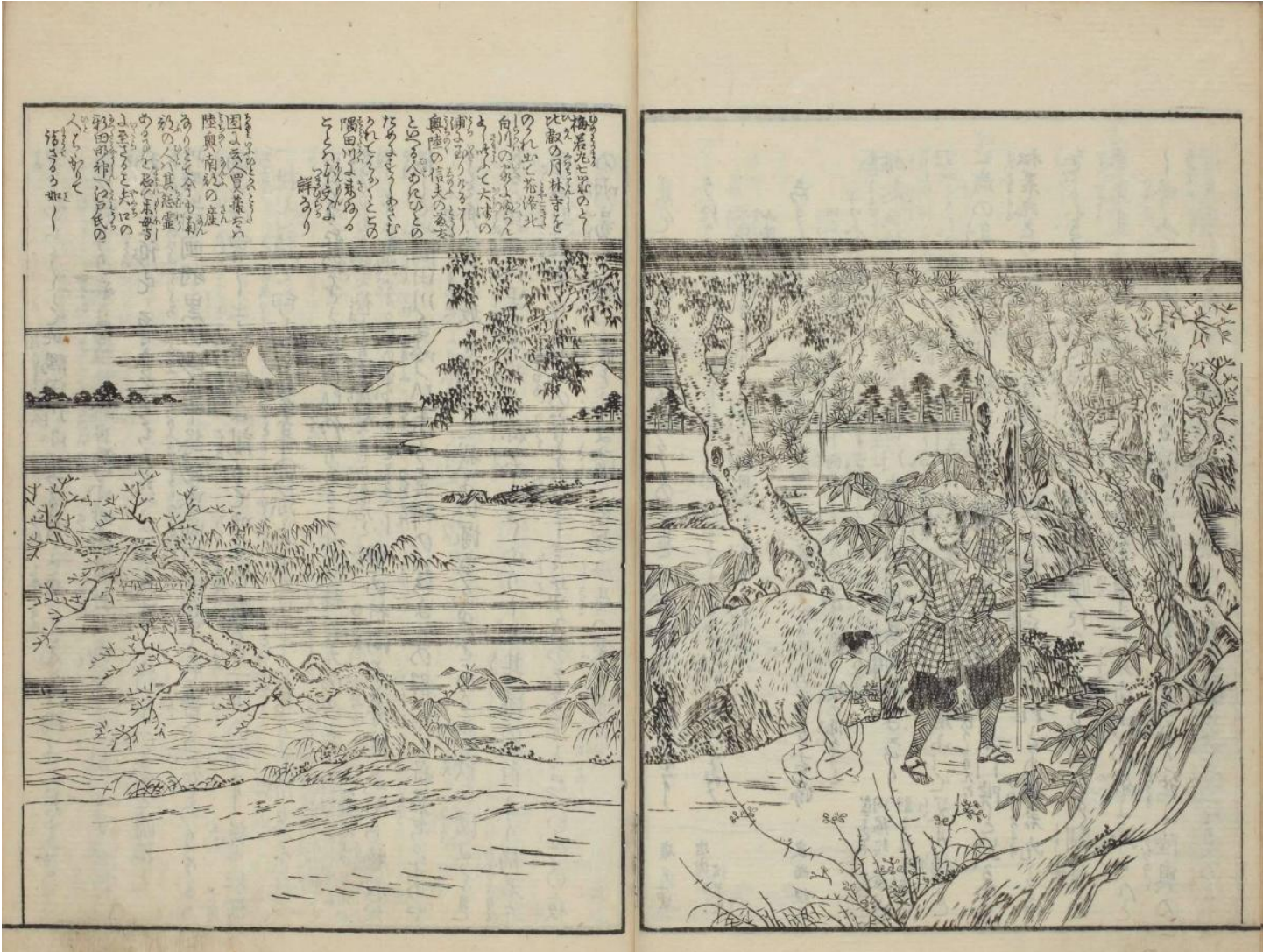
[1131 コマ](#)

[歌川広重「六十余州名所図会 武蔵 隅田川 雪の朝」\(MET, No. JP594\)](#)

## 江戸名所図会



## 江戸名所図会



## 江戸名所図会

春とすれはうゝ柳のたゞのそそ風流の隅田汀を流す  
うねるとさひおとや古塚と都の字々々々々川風のまき  
此條の末にまきに著す所の如く短冊の和あり名書  
山内住人とあり  
あつちゆとさうい竹も朽とくあられいあつちのころ古塚  
此の所の曼珠院宮堂東へ下向あり一神此のまにほひの頃の傳き  
い真蹟の短冊今も短冊に著せり名書後入とのまあり  
縁起云梅若丸の洛陽北白川吉田少将惟房卿の子なり  
吉田の御神は神あり後儲られし一児あり其名若丸なり  
又此のより一花のさすれいと梅若丸といふこと  
七歳の年比叡の月林寺よ入て習学せり又其頃東門院といふゆも  
松若丸といふ児ありて日頃才の程を挑み争ひけれとも梅若丸より  
をいふをさすりさるを彼坊の法師原に惜むありいとを闘争の  
事とす  
事出まよられ梅若丸の潜小舟を道して北白川の舟は帰らんと  
吟めて大津の浦小至る頃二月廿日あつちの夜より然と陸奥の  
信夫孫ちといふ人商人小舟のひ孫ちより欺きて遠く東の方小

康道公  
近衛  
信尹公  
良尚親王  
同縁起は惟房は  
副多兒を慶一曰



# デジタル文学地図



・歌川広重

『六十余州名所図会』

武蔵・

隅田川

「雪の朝」

## 和歌（DLMにない例）

すみだがはのほとりへ花見にまかりけるに、雨いみじうふりければ  
隅田川堤の桜人ならば笠きせましをみのきせましを

（うけらが花・204・加藤千蔭）

すみだ河夕漕ぎ渡り筑波嶺の端山に続く雪を見るかな

（うけらが花・878・加藤千蔭）

すみだ河堤の花の唐錦春はきて見ぬ人やなからん

（琴後集・221・村田春海）

→江戸になると、雪と花を取り合わせる歌も見られるように、  
隅田川は京の賀茂川に匹敵する東都の川と意識されるようになる。

# まとめ

- ・ デジタル文学地図を活用することで、視覚的に名所間の距離が説明しやすい。  
(By using the digital literary map of Japan, it is easy to visually explain the distance between famous places.)
- ・ テキストだけを使って説明するよりも、典拠の情報が引き出しやすい。  
(It is easier to extract information from the source than to explain using many textbooks.)
- ・ 一つの地名に拘って調べることで、様々なジャンルの文学や演劇の面白さに気付ける。  
(By researching a single famous place, we can notice the fun of various genres of literature and theater.)
- ・ 名所研究や典拠研究に必要なヒントを与えてくれる。さらに調査を進めたい欲求を喚起する。  
(It gives us the hints we need for research on famous places and references. It also inspires us to do further investigate.)

## 今後の課題

- 用例を増やす。「隅田川」は後世の演劇作品（浄瑠璃・歌舞伎など）に影響を及ぼし、隅田川物と言われるジャンルが形成されたが、それらの用例があるとよい。  
(Increase the number of examples.)
- 歴史地図（れきちず）やデジタル化された古地図を重ねて表示する機能の実装。  
(Implementation of a function to display historical maps and digitized old maps on top of each other.)
- 時系列表示・タイムスライダーによって特定の時代の名所・作品を表示させる。  
(Display landmarks and works from a specific era by using a time slider.)
- ユーザー投稿機能（User post function）